

【事例紹介】

フィンランドの教育・留学事情

－「森と湖の国」への留学のすすめ－

Current Trends on Finnish Education and Study Opportunities in Finland: An Encouragement for Studying in the Land of Forests and Lakes

フィンランドセンター アカデミックリサーチ・コーディネーター 原 あかり

HARA Akari

(Academic Research Coordinator, Finnish Institute in Japan)

キーワード：フィンランド留学、生涯教育、フィンランドの教育

1. はじめに

2019年にフィンランド及び日本は外交関係樹立100周年の節目の年を迎えた。フィンランド、日本においてこの記念の年を祝う催しが多数開催され、政府・民間様々なレベルで交流が行われた。

「フィンランド」と聞いて、ムーミン、デザイン、サウナにサンタクロース、オーロラなど、様々なイメージを持たれる方も多いのではないだろうか？中でも、「教育」はフィンランドが福祉国家として力を入れていることの大きな柱の一つであり、GDPに占める教育支出の割合は日本が2.9%、OECD平均が4.0%(いずれもOECD 2016)に対し、フィンランドは5.4%(OECD 2016)となっている。結果としてフィンランドは、イギリスのレガタム研究所が出したレガタム繁栄指数(Legatum Prosperity Index 2018)ランキングにおいて世界No.1の教育国となるなど、教育について語られることも多い。本稿では、質の高い教育を提供するフィンランドの教育制度のほか、フィンランド留学のすすめと題し、留学情報について取り上げ、日本の学生や社会人の皆さんが留学先にフィンランドを選ぶための参考となれば幸いである。

2. フィンランド共和国概要

フィンランドは、フィンランド語で Suomi (スオミ) と呼ばれる。スオミの語源は諸説あるものの、一説に「湖沼のあるところ」を意味しているという。その名の通りフィンランドは、しばしば「森と

湖の国」という代名詞つきで語られることが多い。実際に、国土の約75%が森林で約10%が湖沼となっており、自然享受権(jokamiehenoiikeudet:ヨカミエヘンオイケウデット)としてベリー摘みや釣り、テント張りなど基本的に自由に自然での活動を行うことができるのも特徴だ。

およそ33.8万km²の国土に人口550万人が住む。大まかなイメージとしては、日本とほぼ同様の国土に東京都の約半分に満たない人々しかフィンランドには住んでいない状況を想像していただきたい。

言語については公用語が2か国語あり、フィンランド語とスウェーデン語である。それぞれの言語を母語とする人々は88%、5%おり、北極圏地域ではサーミ語もおよそ2,000人の人々が使用している。実際にフィンランドを旅してみると、地名でさえもフィンランド語、スウェーデン語それぞれ異なる名称が書かれた標識があることに気がつく。中でも、人口の5%に当たるスウェーデン語を母語とする人々は、スウェーデン系フィンランド人と言われ、南西沿岸部やフィンランドとスウェーデンの間にあるオーランド諸島に居住している。スウェーデン系フィンランド人の中には、数々の著名人もおり、例えばムーミン物語を執筆したトーヴェ・ヤンソンや作曲家のジャン・シベリウス、画家アクセリ・ガッレン＝カッレラなどである。

3. フィンランドの教育制度

1) プレスクール、基礎教育（小中学校）

フィンランドの義務教育は、6歳児が通うプレスクールから始まる。ここでは、小学校に入学する前の社会的なスキルを学ぶ場で、週20時間の通学が義務となっている。その後7歳から、小中学校に当たるperuskoulu（ペルスコウル）に入学する。国が制定したナショナルコアカリキュラムを基に各自治体が運営する学校ごとに実践される。2014年に「transversal competence」という観念が導入され、知識・技能・価値観・態度・意思で構成された観念で、知識や技能を応用する科目横断的な教育が実践されている。学ぶことを学ぶ「Learning to Learn」という姿勢を持ちながら生涯教育や自己表現、マルチリテラシーとICT、新しいことを学ぶスキルなどがより重視されている。

2) 中等教育（高校）

基礎教育課程を終えると、普通高校(lukio:ルキオ)か職業高校(ammattikoulu:アマーティコウル)もしくは就業するかを進路を選択する。90%以上の学生が普通高校あるいは職業高校への進学を選択するようだ。普通高校のシラバスは3年間で完了できるようにデザインされているが、生徒によって2~4年間で完了する人がおり、フレキシブルとなっている。

大学進学を希望する場合には、大学入学資格試験(ylioppilastutkinto:ユリオッピラストウトウキント)があり、その結果をもって大学進学先が決定する。一方、職業高校では専門的職業資格(ammattillinen perustutkinto:アマーティリネンペルストウトウキント)、上級の職業資格

(erikoisammattitutkinto : エリコイスアマーティトゥキント)が与えられる。

3) 高等教育

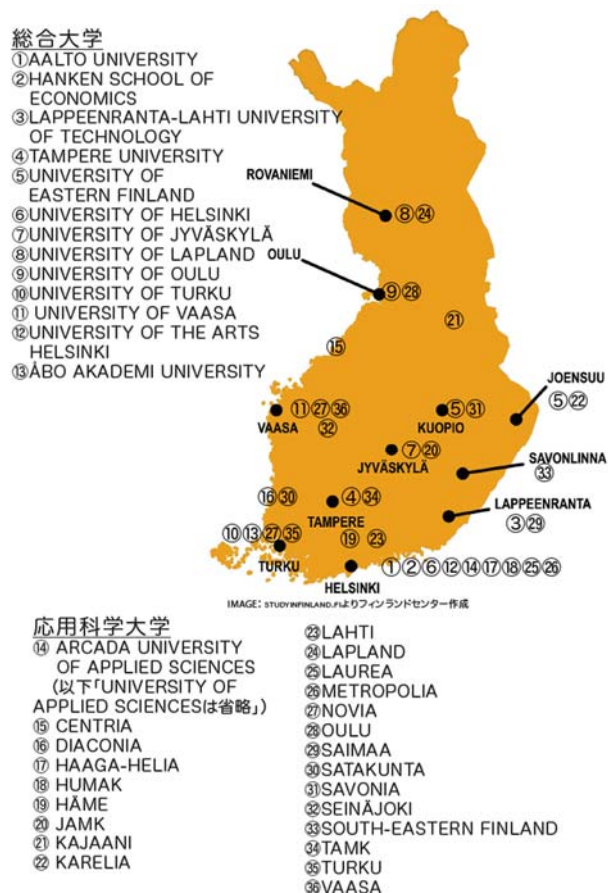
フィンランドには、主に2種類の高等教育機関が存在する。総合大学 (yliopisto : ユリオピスト) と応用科学大学 (ammattikorkeakoulu : アマーティコルケアコウル) である。

総合大学は全国に13校ある。主に12分野 (農林水産、ビジネス&法律、教育、工学、人文学、自然科学、社会科学など) において理論に基づいた研究を行っており、学士号から博士号までを取得可能である。年間1,600時間の授業時間があり、欧州単位互換制度でいう60 ECTSに相当する。学士課程では、卒業に必要な単位は180 ECTSであり、およそ3年、修士課程は120 ECTSの取得が必要でありおよそ2年間を要する。

一方で、応用科学大学は全国に23校あり、総合大学とも類似した10分野において、就労を見据えたスキル取得に繋がる勉学を積むことができ、地場産業や企業とも密に連携しながら実践的な学びを行うことのできる高等教育機関である。

以下の地図は、フィンランドの総合大学と応用科学大学のメインキャンパスの所在を示している。南部にある首都ヘルシンキから北部・北極圏の中心地であるロヴァニエミに至るまで高等教育機関が点在している。

【フィンランドの高等教育機関 (フィンランドセンター作成)】



4. フィンランド教育の特色

フィンランド教育の特筆すべき点であり大前提となっていることは、「equity」つまり誰にでも平等ということである。プレスクールから高等教育（学士～博士課程）の授業料が無料であり、学校給食（プレスクール～高校）や教科書（小中学校）まで無料なので親の所得に左右されず国民は誰でも同等の教育を享受することができる。例えば、2019年末に様々なメディアでも取り上げられた、34歳のフィンランド史上最年少で首相に就任したサンナ・マリネ氏。彼女のバックグラウンドにも注目が集まり、貧困家庭から一国の政治のトップに君臨できることを証明した結果となった。

また、平等な教育によってもたらされているのは、国民の高いウェルビーイング（Well-being）である。1948年に発効した世界保健機関憲章前文に「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう」とある（出典：日本WHO協会）。well-beingとは「すべてが満たされた状態」と訳されているのだがフィンランドでは、2018年、2019年と2年連続で世界一幸せな国（出典：持続可能な開発ソリューションネットワーク（SDSN）による世界の幸福に関する報告書）に輝くなど、国として社会的支援の充実や人生選択の自由度の高さ等の要素から高いウェルビーイングを達成している国とされている。

こうした平等で質の高いフィンランドの教育は、何も学校教育のみに限定されるのではなく、生涯教育を念頭に置き、年齢や背景に関わらず学びたい時に学ぶことのできる「行き止まりのない教育」を重視している。全国に181を超える成人教育センターがあり、例えば、国民成人学校(kansalaisopisto: カンサライソピスト)、労働者教育センター (työväenopisto: トゥヨヴァエンオピスト)、夏季大学 (kesäyliopisto: ケサユリオピスト※夏季に限らず年間を通じて開講)などで言語、IT、芸術など様々なコースを年齢・教育背景に関わらず比較的リーズナブルな値段で受講することができる。また、全国720箇所（中央館および分館を対象）に点在する公共図書館もまた国民の生涯教育を支える場所となっている。教育は、個人のスキルアップだけではなくひいては社会的な恩恵をもたらすと考えられている。

5. フィンランド留学のススメ

本項では、将来フィンランドに留学をしてみたいという方に向けて、フィンランドに留学する3つの魅力を筆者なりにまとめてみたいと思う。なお、フィンランド留学に関しての情報提供や照会は、フィンランドセンター¹が行なっているので、留学担当窓口 (science@finstitute.jp) までご連絡をお願いしたい。

¹ フィンランドセンターは、東京・南麻布に位置する文化機関で、1998年に設立。フィンランドと日本における学術(science)、文化(culture)、高等教育(higher education)の分野で両国の対話を築き、より強固な協力を強化することを目的に活動している。フィンランドの教育文化省からの基金により運営されている非営利団体。

1) 魅力1：英語で履修が可能

前述のように、フィンランドの公用語はフィンランド語とスウェーデン語であるが、フィンランドでは7歳から外国語としての英語を授業の科目として履修することができ、総じて国民の英語理解力・運用力は非常に高い。生活の中では、外国の映画やテレビドラマなどは原語のまま流され、公用語2カ国語の字幕がつくため、外国語に知らず知らずのうちに触れ、それが新しい言語の習得に幾分か寄与しているのではないかと思う。学問の世界でも英語の使用には積極的であり、フィンランドの高等教育機関では、400コース以上が英語で開講されており、英語で学士号や修士号を取得することが可能である。なお、英語で取得できる学士課程は総合大学よりもむしろ応用科学大学で多く、年間100コース以上が開講されている。また、修士課程は総合大学であれば200コース以上から、応用科学大学ではおよそ20コース程度から英語でのプログラムを選択することができる。

2) 魅力2：自然に囲まれた豊かな生活環境

国土の約85%が森や湖を占めるフィンランドは、首都ヘルシンキでさえもバスや電車で15~30分もすれば海や森といった自然に行きつき、地方都市に至ってはまるで森の中に街があるかのように感じるほど、自然と人々の暮らしとの距離感は近く感じる。フィンランド人の余暇活動に関する調査（TNS Mind Atlas 2018. 複数回答可能の多選択方式）では、48%の人々が自由時間の際には、自然でのアクティビティを行うとしており、フィンランド人のウェルビーイングにおいても重要な役割を担うのが身近な自然の存在であるようだ。夏には日が沈まない白夜を体験し、逆に冬には太陽が昇らない極夜という日本にはない極地気候を体験することができるほか、そうした自然環境とともに生きるフィンランド人が実践する生活を楽しむ工夫を知り、暮らしを体験することができるのも魅力的である。

一方、生活環境について気になるのは、物価の高さや留学経費についてではないだろうか。確かに、フィンランドは世界的に見ても高い税率を設定している国の一つであり、VAT（付加価値税）の標準税率は24%で、軽減税率として10%（交通、書籍、薬品、宿舎、スポーツ、映画等）と14%（食品、ペットフード、レストラン、ケータリング等）がある。ただ実際のところ、フィンランドで留学生活を送る場合には、学生向けに様々な割引制度があり、意外とリーズナブルに生活することができる。例えば、留学先の学生ユニオンに加入して発行される学生証を提示すると毎日の学生食堂での食費に割引が適用され2.6ユーロ前後（約300円）で栄養満点の食事を取られる他、公共交通機関にて長距離列車、近郊列車に乗る場合それぞれ正規料金から30%、50%オフで利用することができるなど、様々な割引制度がありフィンランドは、何かと学生にとってやさしい国である。一般的に、フィンランドでの留学生生活費用は、居住都市や個々の暮らしぶりによるものの、月間700~900ユーロ程度（約84,000円~10万円）とされている（留学期間をカバーする海外旅行保険、交通費、食費、家賃等諸経費を含む）。

2017年からフィンランドの高等教育機関では、EU/EEC 圏外からくる留学生に対して授業料が有償となった（ただし、フィンランド語・スウェーデン語で学士・修士課程を履修する留学生や履修言語に関わらず博士課程履修生は2020年現在も授業料は無料）。大学・学科コースによって異なるものの、年間8,000～16,000ユーロ前後（約96万円～190万円）で、EU/EEU 圏外からの留学生に対して50～100%の奨学金も各大学から広く提供されている。

3) 魅力3：個の主体性を尊重し、生涯学び続ける人材になる

筆者自身も1年間、フィンランドで大学時代に学び、感じたことなのだがフィンランドの留学生活は、自分が求めれば可能性は大きく広がる環境が整っている。授業は一つのきっかけであるが、自分をもっと調べたいと思えばどんな本をどのように探したらいいのか教授からアドバイスをもらえたり、留学している街にある「現場」を視察することで教室で学んだ理論がより実践に近い形で実感され、新たな気づきをもたらしてくれる。

授業形態は履修するコースにより形式が異なっているが、講堂での講義もあれば小グループに分かれてのグループスタディーの他、ひいては授業が全くない授業もあった。授業で使う資料は授業のポータルサイトにアップロードされ、適宜ダウンロードをするペーパーレスな授業。試験についても多種多様で、論述式の筆記試験もあれば、3人程度のグループプレゼンテーション、学習日誌をつけるラーニングダイアリー、そして前述の授業が全くない授業はブックイグザムと言われ、指定図書を期間内に読んでその内容について論述するものなどである。

こうしたフィンランドでの留学では、自分の研究・学習を計画し、時にクリエイティビティーを使って表現し、次なる学びへとつなげるというプロセスをたどっている。それがフィンランドの教育システムが「行き止まりのない教育」と言われるように、学びたい時に学ぶ環境が整っており、それは何より住んでいる国や場所がどこであれ生涯にわたり自ら学び続けることを学ぶという姿勢を身につけることができると思う。

6. 最後に

ここまで、フィンランド共和国の概要、教育制度とその特色、そしてフィンランドを留学先として選ぶことの魅力について簡単に述べてきた。留学は他文化に出会い、そこから自分自身の成長や他者や社会との共生を模索するとてもよい機会だと思う。その留学先として、フィンランドを選択していただき、様々な分野で活躍する人たちが育っていくことを願っている。

フィンランドセンターでは、個別留学相談や説明会実施のほか、フィンランドでの1週間の短期留学プログラム「カルチャー留学」を年2回程度主催しているので、ぜひご活用いただきたい (<http://www.finstitute.jp/ja/>)。

《参考文献》

フィンランド留学ガイドブック（フィンランドセンター発行、2019年）

フィンランドの教育 成功への道（フィンランド外務省、駐日フィンランド大使館広報部発行、2017年）

Finnish Education in a nutshell (2017)

(<https://toolbox.finland.fi/life-society/finnish-education-nutshell-2017/>)

OECD publishing “Education at a Glance 2019”

(https://read.oecd-ilibrary.org/education/education-at-a-glance-2019_f8d7880d-en#page45)

World Happiness Report (<https://worldhappiness.report>)

リンク

日本 WHO 協会 (<https://www.japan-who.or.jp/commodity/kensyo.html>)

Finland Toolbox (<https://toolbox.finland.fi>)

Finnish National Agency for Education (<https://www.oph.fi/en/education-system>)

Santander | Trade Markets

(<https://santandertrade.com/en/portal/establish-overseas/finland/tax-system>)

Studyinfo.fi (<https://studyinfo.fi/>)

This is Finland

(<https://finland.fi/facts-stats-and-info/what-do-people-in-finland-do-in-their-free-time/>)

Visit Finland (<https://www.visitfinland.com>)